

# 真理通信

第 87 号 平成 27 年 (2015 年) 3 月 1 日発行

## 巻頭

諸根(こころ)の寂靜(しずか)なること

まことよく御者に馴(な)られし 馬のごとく

慢(たかぶり)をすて 諸漏(まよひ)をつくせる

かかるひとを 神々もうらやむなり (法句經 94)

## ◇新：法句經講義 4 5 ◇

<※「新・法句經講義」は、巻頭ページ掲載の法句經について解説しています。>

最近、電車に乗って椅子にすわると、大概の人はスマホ(スマートフォン)をいじり始めます。本を読む人が、メッキリ減ったように思います。居眠りをする人まで減ったような気がします。それほど、人を引きつける力をスマホは持っているのでしょう。

ともかく、人はおしゃべりが大好きです。メールにしろ、ツイッターにしろ、人は、おしゃべりをするので安心する性質を持っています。自分がひとりではない、という安心感が、人の心を安定させることは確かです。いつでも、誰かと結びついているという安心感が、スマホ熱中間人を増やしているようです。

その一方で、静けさや落ち着きが、社会全体から失われ始めているような気がします。常に人の意見を気にしたり、人との繋がりがばかり優先するのでは、自分というものが失われていきます。

仏教では、「寂靜(じゃくじょう)の境地を理想とします。静けさの中に身を置き、何にもとらわれないことが、真実の生き方への第一歩と考えるのです。心を落ち着けて考えてみれば、今日の評判も友だちの意見も、ほんの一時のことなのです。静けさの中に真実をみる — そんな人になりたいものです。

### 仏教豆知識 65

### 利益

利益は、仏教では[りやく]と読んで、仏様から得る恵み、幸せのことを言います。厳密に言うと、自分のために行った善行の結果の恵みは[功德(くどく)]と言い、他人のためにつんだ善行の結果が「利益」と言われます。また、この世で得られる利益を[現世利益(げんぜりやく)]と言い、来世で得られる利益を「後世利益(ごせりやく)、当益(とうやく)」と言います。現世の自分の幸せばかり願っ

ていると「ご利益信仰」と言われます。仏教本来の信仰のあり方は、誰に恵みが訪れるか分からなくても、善行を積むことです。

## < 主管所感 >

### 恕のこころ

友松浩志

神田寺の 1 階にある応接室の壁に、ゆったりとした書体で「八風吹不動」と書かれた額が飾ってあります。八風吹不動(はっふうふけどもうごかず)とは、どんな風が吹いてもけして動かないこと、京都・清水寺の管主を 70 年も勤められた大西良慶師が書かれたものです。良慶師は、昭和 58 年に 109 歳で遷化されましたが、その明朗闊達なお人柄、非凡な学才、分かりやすい名説法は、今でも語り継がれ慕われる名僧です。

良慶師と、神田寺の先々代住職・友松圓諦師との間には、長い交友関係がありました。それは戦時中、圓諦師が幕末から明治期の仏教史研究をライフワークにしていたことに始まります。圓諦師は、幕末に清水寺の住職を勤め、西郷隆盛と深く関わった尊皇派の僧侶

「月照」の研究を集中して行なっていました。その資料を探しに清水寺を訪れ、良慶師と対面した圓諦師は、思わぬ厚遇を受けます。月照の自筆の遺稿 2 冊を、借りることが出来たのです。それを東京に持ちかえり、書き写しながら研究を進めていた折り、東京はあの大空襲を受けることになります。3 月 10 日の夜、大切な月照の遺稿は、防空壕の中で焼失してしまいます。

被災後、おそるおそる清水寺を訪れ、事情を説明すると、良慶師は「君の生命があったからいいじゃないか」と、さらりと言われ、その後、圓諦師は手元の資料を使って膨大な

「月照」の研究書をまとめます。焼失した遺稿も、書き写してあった写しを活字にして、「忍向遺稿」として自費で刊行しました。(吉川弘文館の「月照」はその成果の一部。)

最近、「恕」という字が、好んで取りあげられることがあります。「恕」と似ていますが、意味は正反対。恕とは「じよ」と読んで、ゆるすとか、人の身になって考えること。まさに、心の如く心のままの、良慶師の「恕のこころ」が、圓諦師にとってどんなに有り難かったか。それは、生涯忘れることの出来ない思い出となったのです。

圓諦師は、昭和 48 年 11 月 16 日、月照と同じ命日に亡くなりました。今年、43 回忌を迎えます。そして今年、良慶師 33 回忌の年でもあります。

# 真理通信

第 88 号 平成 27 年 (2015 年) 7 月 1 日発行

## 巻頭

この心 さきには その望みにまかせ  
欲にしたがい たのしみにそいて さすらい往(ゆ)けり  
されど今日(きょう)こそ われよくこれを制(ととの)えん  
まこと象つかいの 鉤(かぎ)をとりにて 醉象を御(ご)する  
がごとく (法句経 326)

### ◇新：法句経講義 46◇

<※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。>

金具のついた棒で、暴れる象を象使いが制している、そんな場面が目につかぶ偈です。当時のインドの社会において、象は、乗り物であり重機であり戦車でもある重要な存在でした。それゆえに、大変尊重されて、お釈迦様のご生誕をお祝いする[花まつり]では、白い象に花御堂を乗せてパレードするわけです。

その象が暴れている。暴れている象を制することは、象使いにとってなくてはならない技術だったはず。象使いのように、自分というものを制御することが出来れば、どんなにいいだろう。

ここに、[今日こそ]という言葉が入っています。これまでは、思いのままに暮らしてきたけれど、今日これからは、自分をコントロールしていくぞ、という決意がこめられています。「決意」というのは、一瞬で決まるものです。時間をかけてじっくり決めたように見える「決意」も、決めた瞬間というのは一瞬です。その「決意」を「今日こそ」実行する。過去の自分とらわれず、過去の自分と決別する。その覚悟が出来れば、新たな自由が得られる。

自分を改める決意こそ、菩薩道(ぼさつどう)の人口なのです。

仏教豆知識 66

解脱

解脱(げだつ)、というのは解き放つということ、様々な束縛から開放されることを言います。この解脱という考え方は、仏教だけでなく、インドの多くの思想・宗教にも見られるものです。インドの伝統的な考え方では、輪廻(りんね)・繰返し生まれかわるこ

と)からの開放を言いましたが、仏教では、煩惱(ぼんのう・欲望のとらわれ)を捨てること、それを解説として、修行の目標にしました。煩惱を捨て解脱すると、「阿羅漢(あらかん)」と呼ばれ、解脱した心にはもはや迷いがなく、煩惱も再び生じることがないので、悟りに達した理想の姿とされました。

## < 主管所感 >

### 70年目の祈り

友松浩志

今年は戦後 70 年になります。夏には各地で、追悼法要が行なわれることと思います。

当寺が属する浄土宗の総本山・京都の知恩院から、「戦没者」の名前と戒名をまとめて報告してほしい旨の手紙が来ました。戦没者というのは、戦死者と戦災者ということで、寺の過去帳を広げて、昭和 20 年 8 月以前の戦没者らしい戒名を拾ってみて驚きました。戦死者は約 20 名、戦災者は約 70 名におよぶのです。当寺の過去帳そのものが、戦災で半分焼失してしまい、戦後何とか復元したものですから、実際はこの数をかなり上回る戦死者戦災者があつたはず。実際はこの数をかなり上回る戦死者戦災者があつたはず。

数年前に亡くなった檀家のある男性は、優秀な成績で兵学校を出て、大陸で活躍して、戦争が終わって帰ってきたら、家族誰一人、生き残っていなかったと言います。父も母も妻も子も、みな戦災死していたのです。家族 6 人の位牌を作り、戦後を生きられました。東京の下町に大空襲があつたのは、昭和 20 年 3 月 10 日。終戦まであとわずか 5 ヶ月です。その日に並ぶおびただしい数の戒名は、全て空襲の被災者です。よく見ると、高齢の女性が多いことが分かります。あとは、若い家族。そこには、何人もの子どもの戒名も並んでいます。つまり、とっさに逃げられなかった人たちです。高齢者と子どもたち、そして、おそらく子どもを守ろうとして逃げおくれた若い両親たち。

多くの戦没者に、きちんと戒名がつけられています。それは、その人たちを弔った人がいた、ということです。戦死した子を弔った父母、夫を弔った妻。そして、被災した家族を弔った人たち。過去帳に並んだ戒名には、それぞれの思いが込められています。戦後 70 年、弔った人たちの高齢化も進んでいます。

知恩院に全国から送られた戒名は、数万にのぼるそうです。本堂で順次読み上げていくそうですが、多くの家族の思い、残された者の祈りがこだまするこの夏。神田寺でもそれぞれの戒名を、きちんと読み上げていこうと思います。



## 巻頭

身に 語(ことば)に 意(おもい)に悪を作(な)すことなく

この三(みつ)の処(ところ)に心 ととのうるもの

われ彼を 婆羅門(ばらもん)と謂(い)わん

(法句経 391)

### ◇新：法句経講義 4 7 ◇

<※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。>

「身」は行ない、「語」は言葉、「意」は思いのことで、この三つを整えること、正しくすることが、仏教徒の目標・理想とされます。この三つは三業(さんごう)と言われ、「身口意(しんくい)の三業とも言われます。

「身を正す」というのは、身体の形、姿勢を整えることから始まって、行動・所作全般を正していくこと。「言葉を正す」というのは、正しい言葉づかい。口は災いのもとですから、相手に不快感を与えない言葉を使うことも大切です。「思いを正す」というのは、さらに大変なことです。何を考えていても、何を思っている、誰にも分からないかも知れません。でも、それでは正しい行動は生まれません。思いが人の行動のもとになります。

随分難しい課題がなっているようですが、僧侶の修行法として、「一掃除、二勤行、三学問」というのがあります。一番目はまず身のまわりの掃除、二番目はお勤め(読経)、三番目は勉強という方法です。まず身辺を整え、お経を読んで正しい言葉をとなえ、学びのなかに心の向上をめざす— というのです。

それぞれの生活のなかで、それぞれの実践が求められています。

### 教豆知識 67

### 三昧

三昧(さんまい)は、物ごとに集中する様子を言います。読書三昧、釣り三昧、仕事三昧、最近ではスマホ三昧。そればかりしている状態です。もとはインドの言葉(サンスクリット)のサマーディ(Samadhi)を漢字に写した言葉で、心を一つの対象に集中することを言い仏教の大切な修行法の一つとされます。仏教は、「瞑想の宗教」と言われますが、まさに瞑想の第一歩が三昧です。昧(まい)という字は、「味」と紛らわしい字ですが、ここでは漢字としての意味はありません。ちなみに「昧」とは、日が出る前の暗い状態を指す言葉で、「三昧」以外にはあまり使われない字です。

< 主管所感 >

学校の責任

友松浩志

今年の 6 月、宮城県石巻市の大川小学校を訪れました。教職に携わる者として、東日本大震災の被災地で、最も気にかかる、弔問に訪れたい場所でした。津波により、児童 74 名教職員 10 名の生命が一瞬にして失われた場所。戦争以外で、これだけの被害が集中した例はないのです。

あの 3 月 11 日の午後、大川小学校でも下校の時刻を迎えていました。帰りの集会が終わった頃、強い揺れを感じます。子ども達は上履きのまま、校庭に出ます。何人か家族が迎えに来て帰宅。残った児童は 78 名。遠くから通っている児童のため、スクールバスも待機していました。その間に、大津波警報が出されますが、なかなか避難の指示が出ません。校長は年休で不在。教頭以下、教職員の協議が続きます。雪もちらつき始め、子ども達は震えながら校庭で待っています。そして約 50 分後、避難を開始したところへ、10 メートル近い津波が押し寄せてきたのです。

なぜもっと早く避難を開始しなかったのか、なぜ目の前の山に登らなかったのか、現在法廷で争われている問題に、ここでとやかく言うことは出来ません。ただ、学校が地域の避難場所に指定されていたこと、家族の迎えを待ったことなどが、裏目に出たのは確かなことだと思います。

学校の管理下にいる子ども達は、すべて学校の責任で守られる。当然のことです。でも保護者の判断が気にかかる。保護者への引き渡しを優先しようとする。高台の幼稚園から海岸に向かって「帰りのバス」を発車させた判断もそこにあったように思います。でも、大規模災害時には、保護者も自分の生命を守るのに必死なはずです。そんな時、保護者の判断を待つ必要はない。保護者を待たずに、学校の判断を実行する。

あの時、もし大川小学校の児童が早めに避難を始めていたら、あの地区の人たちも避難を始めて、多くの生命が救えただろうという意見があります。ガレキも撤去され、学校の廃墟以外何もなくなった荒地に立って、無念の思いが一層深まりました。

### ◆ 圓諦忌 4 3 回忌法要 ◆

- 記念講話でその業績を振り返る -

11 月 16 日、神田寺の先々代主管・友松圓諦師の 43 回忌法要が行なわれました。当日は、檀信徒の皆さんや以前神田寺に奉職して下さった方々約 40 名が集まって下さり、はじめに全員で、神田寺勤行式で聖歌・読経を勤めました。

その後、大正大学名誉教授の石上善應先生から、記念講話を約 1 時間伺いました。石上先生は、神田寺とは長いご縁があり、青年会活動に参加された青年時代の思い出や、研究活動での圓諦師との様々なエピソードなど、感慨深くお話しして下さいました。

また、圓諦師の独仏留学時代の業績や仏教革新運動についてもふれられ、「圓諦先生の業績は、今こそ再評価する必要がある」と、締めくくられました。講演後、歓談。夕方、散会しました。